

防衛懇話会米国（ハワイ）軍事視察に思う

平成31年2月4日

防衛懇話会会員 須川 薫雄

はじめに)

結論から言えば、現在の「日米同盟」は世界最後の砦と言って良いほどお規模、装備、実力を誇っているもので、もし日米同盟がなければ、昨今、急速に混迷を深めている世界情勢混迷の歯止めとなる国際間協調はなくなり、世界は一瞬にして奈落の底に落ちると言っても過言ではないと思う。

米国と日本は世界 GDP の1位と3位、この両国を合わせれば、世界の体制の安定化に貢献していることは明らかである。

(無論 GDP が世界の安全保障を意味するものでないことはロシアや北朝鮮の例をみれば理解できるが。)

さらに太平洋を挟んでは、米中は世界経済、政治史上無いような貿易戦争に突入し、この行先は見えないどころか長期化する恐れもある。

(昨年来、聴いた専門家の話では20年間はかかると。)

その他、以前は化石燃料カルテルで団結していた中東の混乱、ロシアの迷走、EU の分離と移民問題、アフリカや中南米の個々の国の不

安定、朝鮮半島の不透明、不健全化、それに最大の脅威は中国の海洋、宇宙、サイバーへの不合理な拡張主義である。

米国は新政権での国内的な課題はあるが、米国史をみれば今までもあったことだ。（１９世紀半ばの南北戦争時代に戻れば別だが、すでに成熟した大国、その恐れはない。民主的手法で彼等は彼等の課題を解決する。）

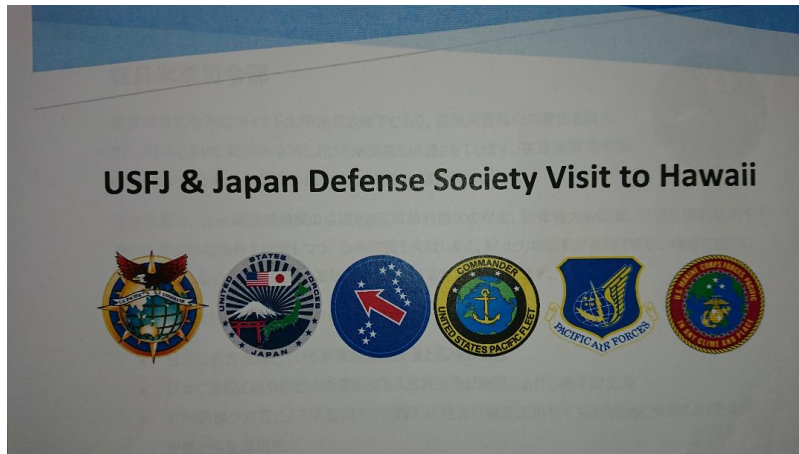
現状、日本は恐らく世界を見渡しても、政治、社会、経済、未来志向、すべてにわたり安定している国家と言って疑いない。（まだ民主主義の行き過ぎによる自虐的反日思想は蔓延しているがいずれはその指導者はピエロとなり消滅するだろう）

筆者自身、過去１０年間以上にわたり、日本の安全保障および自衛隊全般に関して、「防衛省モニター」を皮切りに、「土浦駐屯地モニター」、「市ヶ谷駐屯地モニター」、「東部方面隊オピニオンリーダー」などを拝命し、現在も武器学校技術資料館顧問を務めている。

一方、日本国の外交史に関しては交詢社外交研究会会員として多くの知識者、評論家との質疑応答を経て、日本の国際的位置、近隣諸国との諸問題、などを１０年間研究してきている。

上記問題意識を踏まえ、近年の国際情勢大変化、複雑化のなかで日本

国はいななる道を歩むべき、また将来どのような問題、課題が山積するかを自ら研究していた。（防衛懇話会ハワイ訪問レジュメの表紙）



以下、平成31年1月21日より24日の間、防衛懇話会会員9名、事務局1名、在日米軍2名の計12名がハワイ、オアフ島の米軍、インド太平洋司令部、空軍、海軍、陸軍、海兵隊の各施設を訪問見学した内容である。

この視察は防衛懇話会が8年ぶりに実施したもので、在日米軍広報部の協力とハワイ各軍の全面的な好意で、我々に多大の知識と深い認識を与えてくれたものであった。

（今回の視察準備及び実施の関係者へ深い感謝をこめる。）

1 インド太平洋軍司令部訪問 1月22日午前

この地域は言うまでもなく、同じ価値観を持つ日米の相互安全保障、国益を守る同盟として共に開かれたインド太平洋の維持を目的としている極めて重要である。米国インド太平洋軍の規模は軍人、軍属計38万人である。



(写真 防衛懇話会、キャンパスミスにて)

インド太平洋軍の課題は、

- ① 中国の覇権主義の最大にして長期的な脅威
- ② 北朝鮮の差し迫った脅威
- ③ ロシアの軍事的能力の不透明な方向性
- ④ テロ過激主義組織対策
- ⑤ 人道支援、災害救助、文民防衛援助

であるとの説明を司令部から直接受けた。

2 太平洋軍空軍司令部ならびに施設視察 1月22日昼



ヒッカム空軍基地に移動し、太平洋空軍の概要の説明を受け、マーク
准将他重要幹部と昼食を採りつつ歓談した。

説明内容は「大国間競争時代を勝つための戦略」という題で
米国の世界戦略におけるインド太平洋軍指揮系統、担当地域の
重要性（世界人口の60%、GDPの40%、貿易額の44%）
将来の課題、軍事的優位性の維持、同盟強化、攻撃力と運用、
配備、など具体的であった。

その後、飛行場に移動し配備されている F-22 に関して、操縦士たちからその性能、緊急発進方式などの説明も受けた。



航空機は実際に配備されているものであり、展示とは異なり、迫力のあるものだった。実際に機体をまじかに観察すると、その形状の優れた点、例えば空力設計、ステルス効率などが実感できたのは大きな成果だった。

3、太平洋軍海軍司令部ならびに艦艇視察 1月22日午後

そのままパールハーバー海軍基地に移動し、太平洋海軍配備に関する説明を受けた。太平洋海軍司令部の施設は大規模で、

200艦の艦艇、5空母機動部隊、1100機の航空機を有する
世界最大の規模であり、日米同盟の最前線は海にある、海軍国同士の
固い同盟が広大な地域を守るという理念が理解できた。

その後、停泊基地に移動し、最近就航したイージス艦に乗船し見学し
た。士官室にはコーヒーが用意されていたが、カップがない。

士官それぞれの名前のある私物を使えとの薦め、温かいもてなしの
一面であった。コーヒーを飲みながら、その士官の健康と活躍を祈っ
た。最大機密である運航管理室（赤い照明のかなり大きな部屋にも入
ったが写真撮影は全員遠慮した）



艦の威容は流石であり、何年か前、横須賀で改造されたイージス艦を
見学した経験があったが、その時感じた、艦内とはかなり異なり、導

線、空間の整備が整っており、艦艇に慣れてない我々でも楽に移動できた点が特記された。

4、 太平洋軍陸軍航空隊基地視察 1月23日午前

2日目の朝、ホノルル市内を出て約一時間の距離にあるスコフィールドに移動した。この地は山間の谷間にある基地で飛行場が主な施設であった。まずはスライドで太平洋陸軍の組織、規模、課題などの説明を受けた。（説明会場の前には担当者が出迎えていた）



その後、現場で航空兵力の訓練状況を聴いたが陸軍的な側面はあまり聞くことはできなかった。説明資料には無人兵器の写真があり、その規模と訓練空域の説明があった。

5、 太平洋軍海兵隊司令部訪問ならびに施設視察 22日午後

カネオへ海兵隊基地は最後の訪問地だった。

同基地はオアフ島ホノルルからスコフィールドと反対側1時間ほどの距離で岬と湾に面した独立した一帯である。

岬の上にはレーダーサイトがあり、岬と山に囲まれ湾に面したところが飛行場と施設だ。1930年代に海軍基地として開発されたが、現在は海兵隊基地で、MV22 オスプレーとアパッチ攻撃ヘリの訓練基地だ。有事の際はこれらの機材は大型輸送機で現地に輸送される。滑走路はアントロノフが訪問したくらい大規模だ。

我々一行へのプレゼンテーションはレーダーサイトの最上階の四方が見渡せる会議室で、基地司令官リアニー大佐以下幹部と担当者から受けた。

同基地は沖縄司令官の隷下であり、オアフ島の幾つかの地点を管轄している。地域社会、州との良好な関係を長年維持してきている。

実際、これだけの数の攻撃ヘリとオスプレー、その整備状況を見学したのは初めてのことだった。



質疑応答はかなり具体的な内容にまで及んだ。



その後、飛行場に降りて、部隊長の案内でブリーフィング室、整備場、

機内などを見学した。

個人的にオスプレーの操縦に関心があり、果たして離発着のヘリコプター機能に関してはどのように扱うか、を質問した。

全て固定翼機と同じ手順であり、発動機回転が回転翼の姿勢を制御するということで、コントロールバーはない。

従って、この機体は回転翼と固定翼のハイブリッドではなく、定義としては「可動式固定翼」機になろうと理解した。

海兵隊は海軍と統合活動が基本であり、岩国の F-35 戦隊、その他基地、海軍機動部隊などと絶えず緊密に戦う準備が出来ている。従って後方基地であっても細かい情報、通信はお互いが共有しているとの確信を得た。(ready and play)

海兵隊員は基本的にライフルマンであり、厳しい訓練のもと地上作戦にも強いが基本だ。

ロシア、中国と対峙するなら日本本土の各基地は重要な作戦拠点になろう。その点、沖縄は地政学的に必要な不可欠な地域であろう。

私が発言した質問は、

イ、日本には海兵隊がないが、共同作戦で不便はないか？

司令官は「日米戦力はお互いが補完しているから作戦上の不便は

ないだろう」と。

ロ、 沖縄の海兵隊は反日、反米メディアの攻撃にさらされているが？

政治的なことでお答え難いのは承知だったが・・

「日本政府は良くやってくれている、岩国やグアムへの移転も含め」と。

歴史上、米国海兵隊の戦場は太平洋であった。これからもその事実是不変変わらないだろう。頑張っていて欲しい。

その他)

6 帝国日本海軍ハワイ攻撃における史跡訪問

今回の防衛懇話会視察旅行ではほぼ21日、一日間をこの研修にあてた。

今までも機会がありすでに訪問したところであるが、防衛懇話会はガイドを用意して、十分に時間を掛け説明し、新しい発見が幾つかあった。

(「フォード島航空博物館」に関しては別な項目として一文をまとめ別途発表したい。)

① 「戦艦アリゾナ記念館」

以前も書いたがまだ大勢のご遺体が船内に残されており、沈んだ艦の上に白い横構造物を建設し、十字架とした、一種の「靖国神社」的な英霊が眠る場所である。



この日は対岸のフェリーから補修のため移動できず、反対側の施設「アリゾナ記念館」を見学した。

② 「戦艦ミズーリー記念館」

第二次大戦中からイラク戦争（トマホークミサイル搭載）まで使用されていた、戦艦の中の戦艦だ。日本とは重要な関係は二つあり、船上にそれらは、詳しく記されていた。



ひとつは東京湾上の日本の降伏文書署名である。東京湾投錨地はペルーが江戸湾に来て幕府と和親条約を結んだ、まさにその地点だったそうだ。(昭和20年9月2日の日本帝国代表団)



もう一つはこの艦艇は昭和20年4月11日、鹿児島沖で特攻機の攻撃を受け火災を起こした。

爆弾は破裂しなかったが、零戦の右翼が衝突した左舷の跡は今でも修復されず凹みが残っている。



キャラハン艦長は操縦士のご遺体を手製の旭日旗に包み、礼砲をもち、丁寧に海に帰したそうだ。

（皮肉なことにキャラハン艦長の祖父名を命名した駆逐艦キャラハンは八重島沖で台湾から出撃した九三式中練習機の特攻で轟沈し1000名以上の乗員が犠牲になった。）

戦艦大和に比べることは出来ないがフルサイズの程度が良い第二次大戦中の戦艦に乗船できるのは良い経験だ。

③ フォード島航空博物館



(飛行可能な 2 1 型)

一度アリゾナ記念館敷地に入り、戦艦ミズリーとこの博物館はシャトルバスで回る。(この方式が分からずフィード島まで渡る日本人は少ない) 全ての施設は民間法人が委託を受け運営しているが、来る度に充実し、内容展示物の管理は良い。なるほど、この方式で「嵐山」などは発想されたのであろうが、残念ながらボランティアとしてサポートする人間がいない、金もうけに走ったので、破綻したのであろう。

この博物館は大きく分けて二棟で構成されている。実機とジオラマの優れた内容だ。

零戦、ハウワイ島の零戦の翼、九九艦爆の破片、ガダルカナルのヘルキャット、B-25,ガダルカナルで零戦に撃墜された B-17,さらに現代戦闘機の歴史とめずらしいものではミグ15があった。

④ 太平洋戦没者と日本人墓地の参拝

(スペースシャトル鬼塚飛行士も眠る)



パンチボール太平洋記念墓地(50年ぶりに行った)と先日安倍総理も参拝した日本移民、遠洋航海で犠牲になった海軍将兵の墓地マキキ日本人墓地、昔は郊外だったのだろうが、今は高層コンドに囲まれているに、全員で献花参拝した。これらも単なる観光旅行では機会はないことだ



⑤ 飯田 房太尉記念碑参拝

ハワイ攻撃第二次隊零戦操縦士のカネオへ基地内の自爆地点記念碑
を参拝した。



7、 自衛隊「七人の侍」(実際には 10 名)に会う

ハワイの各米軍に日本の自衛隊から 10 人の人員が派遣されている。各々の部隊の連絡係だが、現在の日米同盟においては理解、信頼、そして友情を言う意味で重要な任務である。企業の場合もそうだが、この派遣員はお互いに業務上の関係はなさそうだし、我々が行かなければ、一同に会する機会も少ないのではないか。当夜は全員参加してくれた。

会話を通じての感想では、聡明で語学も堪能、何よりも専門領域には優れた人員で、夕食中、愚痴るような発言は一言も聞かれず、日米同盟の強靱化に励んでいたと感じた。



防衛懇話会はこの視察旅行の企画ではかなり頑張った。

事前に企画を聴いた際に、自分のその評価は何回か述べたが。

視察で感じた結論)

昨年来、様々な研究者、評論家の話を幾つか聴き、本年は世界情勢の大きな節目の年としての認識を新たにしていた。

この視察後も米ロの INF 条約の破棄、ベネゼィラ内紛への米国の介入、いずれも、太平洋戦争後の米ソ冷戦（実際は冷戦どころか、朝鮮戦争、キューバ危機、ベトナム戦争、アフガン侵攻など熱戦であった）は 1987 年の INF 条約の締結が終焉の始まりであったと言われているが、第二次冷戦（熱戦を伴う恐れは十分にある）は、研究者の意見を聴く限り、長い、我々の孫子の代まで続く、また日本が最前線となる恐れがある状況だそうだ。

（朝鮮半島は赤色独裁一国となり、中露同盟に加わり、対するは米国、日本、NATO 諸国、ASEAN 諸国と言う対立関係になるとのことだ）

このような状況下、今回のハワイ軍事施設視察の緊張感の背景を理解するとともに、強固な日米同盟は大きな抑止力を創造すると確信した。（以上）